

ウェルカム・アボード

非日常の中の自分探し

増田 和美

聞き手: 佐多保彦 株式会社東機質 代表取締役社長



増田 和美 / ますだ・かずみ
横浜出身。小・中学校を、横浜港が一望できる山手の丘の
雙葉学園で過ごす。早稲田大学文学部英文科を卒業後、ニ
ューヨークのコロンビア大学で応用言語学修士課程修了。
84年ロイヤル・バイキング社の依頼で日本人コーディネータ
ーとしての勤務を皮切りに、ソーシャル・ディレクトレスを
歴任。現在は、フリーのソーシャル・ディレクトレス、東洋
文化講師(船上)、クルーズアドバイザー、客船ジャーナリス
トとして活躍中。

国船、日本の船、1泊の短期クルーズも含めて
ですけれども。この96年には日本最大の「飛鳥」
が96日間の世界一周航海に出まして、これに約
400人が参加されました。「飛鳥」の世界一周は
99年まで完売ということです(*1)。

佐多: それはすごいですね。船旅という^{もり}、森
有正さん^{ありまさ}(*2)なども本に書かれていますが、
日本からヨーロッパまでは、東シナ海を通して
インド洋を越えての航海だったわけですね。船
尾に続く長い航跡を見つめながら、自分の人生
をじっくり時間をかけて考える、とてもノスタ
ルジックですね。そういう時間をもてた昔の人
たちを羨ましく思うこともあります。自分の生
き方が可能性とか、ふだん考えてもいないよ
うなことが出てくるかもしれませんね。

増田: そうですね。現代のめまぐるしい生活か
ら離れて、自己と真正面から向き合う中でいろ
いろな自己発見があるでしょう。若い方でした
ら何日間で欧米の方々の中にとけ込んで生活を
することによって、マナーをはじめ、文化、そ
の他多くのことを学べると思います。若い時代
に船旅を経験すると人生観が変わるでしょう。
本の好きな方なら好きなだけ本が読めます。ふ
つうだったら読んでみようともしない本を読
みたくなったり。寄港地のことは当然知りたく
なりますから、その歴史や文化の本を読んでみ
たり。船の中では時間がゆっくり流れますから、
地球を回ることの意義を感じたりですね。

「飛鳥」の最初の世界一周クルーズは、もち
ろん多くの日本人カップルにとって初めての体
験だったわけです。3カ月間、同じ部屋で昼も
夜も一緒に過ごすわけですから、やはりいろ
いろなことが起こりますよね。夫婦の関係を
見つめ直すいい機会になった方も多かったよう
です。船旅のエッセンスはやはり非日常性です。

佐多: 欧米で盛んなクルーズ旅行に興味があり
ましたので、ご著書の『ウェルカム・アボード』(集
英社)をすぐに読ませていただきました。それ
にしなくても、クルーズのことに加えて、増田
さんの私生活のことがかなり率直に書かれてい
るのに驚きました。

増田: そうですね。読んでいただいたのでおわ
かりだと思いますが、クルーズの仕事は私にと
って現実逃避のようなものだったんです。編集
者の方からもアドバイスがあったのですが、な
ぜ家庭や小さな子供があって長期間船に乗るこ
とができたのかを説明しないと、有閑マダム
のお遊びみたいに見えて現実感がないのではない
かと思ったのです。母としてでも妻としてでも
なく、また女としてでもなく、人間として情熱
を傾けられる何かがあったらと常に思っていま
した。そんな中で、74年に乗客として初めて
QEII(クイーンエリザベス2世号)に乗りまして、
それが船と私の出会いでした。その後、84年
に仕事をするチャンスに恵まれて、船の生活、
人との出会い、そこでのチャレンジなどがどん
どんおもしろくなっていったんです。

佐多: 増田さんが豪華客船でなさっていたソー
シャル・ディレクトレス(social directress)とい
う仕事は、「豪華客船の乗客にクルーズを満喫
してもらうためのエンターテインメントを企画し
実施する船上のもてなし役」と説明されていま
すね。

増田: はい。最初は通訳のようなことから入り
ましたが、その後それだけではつまらないから
と、日本をはじめとする東洋文化を紹介するプ
ログラムを企画するようになりました。東洋文
化と言いますと仰々しく聞こえますが、非常に
実質的なことで、欧米の方がワールドクル
ーズで日本に行く前に、日本の国のこと、習慣な
どを、簡単に覚えるというようなことからはじ
まります。お食事のマナーは、例えばお箸の使
い方ですね。あとはお客様の名前を漢字で書い
てさしあげて意味を説明するとか、折り紙、着
付け、書道、お茶、お花の教室などを企画し
たりします。長期のクルーズではエンターテイン
メントの多様さはお客様にとって非常に重要です。

自分が船が好きでお客として乗船していたので、
お客様の立場というものがよくわかります。自
分だったら何をしてほしいかをまず考えますね。

現在は、主に『クルーズ』(海事プレス社)や『船
の旅』(東京ニュース通信社)といったクルーズ
専門誌に、取材記事や「ワールドクルーズ人間模
様」といったものを書いています。コスモポリ
タン・ジャパンにも1年間連載をしていたので、
それが『ウェルカム・アボード』をまとめるきっ
かけになりました。

佐多: お客として最初に乗られたQEIIは豪華客
船の代名詞のようなものですが、かなり古い船
ですね。

増田: 1969年に最初の航海に出ていますから、
船齢でいいますと30年です。QEIIは毎年1月の
初めにニューヨークを発って、約3カ月半かけて
世界を一周します。大西洋横断は、定期便とし
てサザンブトン、ニューヨーク間を年に20回くら
い往復しています。1800人乗れる船ですが、世
界一周ではだいたい1400~1500人で満杯ですね。
全路線いつもそれだけ乗っているということは
なく、部分部分で400人くらいの時もあります。
豪華客船の名にふさわしく、QEIIのドレスコー
ド(服装規定)は他の船に比べても特にフォー
マルが多くなっています。高い部類の船ではあり
ますが、キャビンはピンからキリまであるので
船底の方は安いものもあります。古い船ですが
何度も改造していきまして、その都度40億円など
という費用がかかけられるんです。こういう船を
新しく造るとなると莫大な費用がかかるので今
では難しくなっています。

佐多: 日本人の船旅というのは増えているので
すか。昨年、大手の船会社が客船事業から撤退
したようですが。

増田: 今の厳しい経済状況からそういったこと
もあると思いますが、お客様自体は確実に増え
ています。日本では、1989年に商船三井の「ふ
じ丸」と昭和海運の「おせあにつく・ぐれーす」
という豪華客船が2隻就航しまして、「クルーズ
元年」と呼ばれました。96年1年間で船に乗っ
た日本人の数は約22万人とされています。外

日常では起こらないことが起こります。非日常性と、それから“時”の贅沢ですね。

船では、ショーやアクティビティのプログラムが朝から晩までぎっしりですから、選択肢が非常に多いわけですね。参加したいものに参加して、あとはぼーっと海を眺めていても、デッキで本を読んでもいいのです。自分の時間をすべて自分で選択して使うことができるというのは、現代ではなかなかできない贅沢だと思います。

佐多：日本ではまだまだこれからという感じのクルーズですが、外国ではどこの国の方々が一番利用されているのでしょうか。

増田：欧州ではドイツの方が非常にクルーズに興味をもっていらして、どこでも多く見かけられます。もちろん数の上で圧倒的に多いのはアメリカ人ですが。あとはイギリス人、カナダ人、それに中南米のお金持ちの方々などですね。

佐多：日本では、休暇の問題や、外国船に乗ったときは言葉の問題などがあるかもしれませんね。世界一周となると、料金はどのくらいですか。

増田：3万ドル弱から、高いものでは16万ドルというものもあります。ちょっと特殊な例として、今年のQEIIワールドクルーズではお一人約40万ドルという破格のデラックス・キャビンが売り出されました。でも、まず初めはカリブ海やアラスカなどの短期クルーズをお勧めしますね。カリブ海クルーズは楽しいですよ。若い方もかなりいらっしゃいます。10万円以下で1週間のクルーズができる船がたくさんあります。よく探せば、日本からのエア込みで13万円台のカリブ海クルーズといったものも見つかりますね。アラスカクルーズは日本の方に特に人気があります。飛行機で西海岸まで行きさえすれば、アラスカの大自然を体験できるのですから。

最近日本でもクルーズ専門の旅行代理店があって、世界の船会社の総代理店もやっています。あとは先ほどご紹介したクルーズの専門誌を見れば、記事も広告も役立ちますね。「飛鳥」の方も、一応完売ということになっております

が、キャンセルなども出やすいですからまだ受け付けてくれると思います。興味がおありでしたら連絡をおとりになってみたら。30年あまり会社に尽くしていらっしゃったご自分に対するご褒美として、3カ月くらいいらっしゃったらどうですか。

佐多：わー、うれしいことをおっしゃって下さる。発想の転換が大事だとは常々考えているのですが、3カ月も船に乗っていると一体どういう気持ちになるのでしょうか。私の場合、パソコンを持ち込んで、インターネットだ、Eメールだとずっと仕事をしているかもしれませんね。

増田さんは、今後はどのように船とかかわっていかれるお考えですか。

増田：2作目を書きたいですね。実際に船に乗るソーシャル・ディレクトレスの仕事は長くやってきましたから、これからは書くことによって、船旅の楽しさとか、いろいろな船のドラマというものを一般の方々にお知らせしたいですね。私自身がこんなに楽しんでいる船旅というものを、他の方々にも楽しんでいただきたいという

使命感のようなものがあります。船を中心にした小説も書いてみたいんです。船はミステリーのシーンには非常に向いていますからね。書いていくことにチャレンジを感じています。

*1「飛鳥」98日間世界一周クルーズ(3月～6月)
360万円～1,750万円(早期申込割引320万円～1,550万円)

*2森有正(1911～1976)
哲学者、フランス文学者。祖父は、明治初期明六社を創立し、また伊藤博文内閣で文相を務めた森有祐。デカルト、パスカルの研究に従事。東大助教授を辞して、昭和25年戦後初のフランス政府給費留学生として渡仏。そのままパリに定住し、自我と西洋文明との精神的対決を多くの著書に残した。著書『バビロンの流れのほとりにて』『遠ざかるノートルダム』他。

